



名古屋

近代の都市づくり



— 三大都市への道 —



池田 誠一

— 連載にあたって —

この連載の中で、何回か、名古屋の都市づくりの歴史に挑戦してきました。主なテーマでは「家康」の都市づくりと「戦災復興」の都市づくりです(文献①、②)。

この二つの都市づくりはよく語られるものですが、その間が抜けているのに気が付きます。明治、大正、昭和の初め。いわば「近代」とされる時代です。この時代の名古屋が、都市づくりとして注目されることは少ないかもしれません。ところが少し考えると、この時代は今日の名古屋という都市の骨格をつくった重要な時代だったことに気が付きます。

そこで、今年は、明治維新から太平洋戦争の終戦までの名古屋近代の都市づくりを、経年的に追ってみることにしました。いつものように見通しの立たないままの出発ですが、明治維新で立場を失った名古屋がどう立ち直って、三大都市に成長したのかを追ってみたいと思います。

池田 誠一

【1】名古屋の近代…大きく変化した時代

1 「近代」の名古屋

江戸時代、名古屋は徳川御三家筆頭の尾張藩の城下町として栄えました。250年間という安定した時代。名古屋は、全国的には江戸、大坂、京都の「三都」に次いで、金沢、仙台と並ぶ町といわれていました。

ところが、三都とこれら三町との差は大きく、人口でいえば、三都の三番目の京都の

50万人に対し、三町は10万人ほどの規模しかない、一地方都市に過ぎなかったのです。

その名古屋は、明治になって、東京と大阪の中間点という地の利もあって、産業や経済が大きく伸びることになりました。そして昭和の初めには人口100万人を突破し、東京、大阪と並んで、我が国の三大都市の1つへと成長することになったのです(図1)。

今回は、そのような「名古屋近代」を大きく眺めて、まず、その変化を考えてみることに

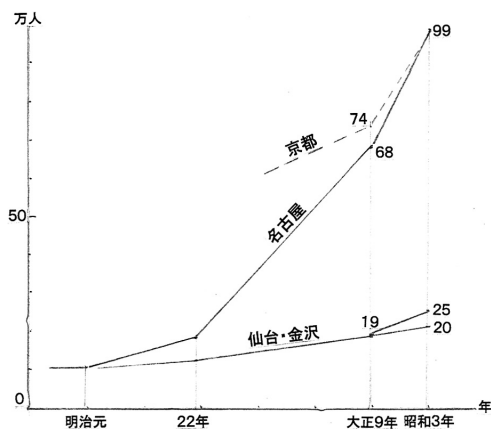


図1 江戸から明治・大正にかけての人口。
名古屋の成長が目立つ

したいと思います。

2 名古屋の都市づくり

(1) 3つの転換点

500年近い名古屋の街の歴史を眺めてみると、その間に、3つの大きな転換点があったことに気が付きます。

1つは、400年余前の「開府」と呼ばれる、徳川家康の城下町づくりです。今川、織田の

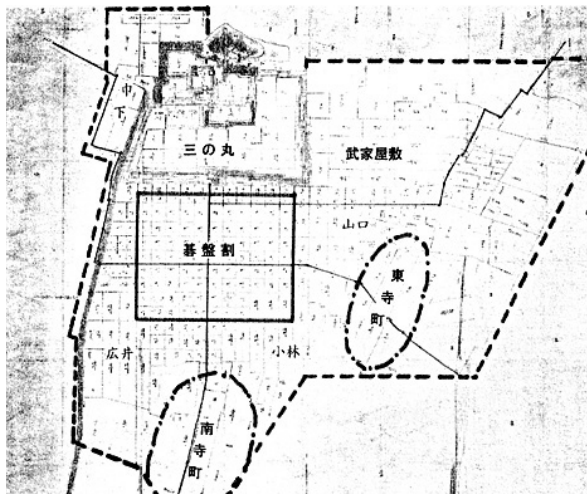


図2 城下町名古屋の都市計画

つくった町並みを白紙にして、全く新しい近世の城下町をつくりました(図2)。

2つは、150年程前に始まった「明治維新」です。城を中心とした街から、城の不要な街へ。新しい西洋文明を取り入れた近代都市への衣替えを始めました。

3つは、70年前、太平洋戦争で廃墟となった街の「復興」です。特に戦災の激しかった市の中心部は、外科的な大手術が行われ、現代都市への脱皮を果たしました。

これらの3つの時代を見ると、2つ目の近代の都市づくりは前後の2つとは少し異なっていることに気が付きます。1つ目の近世も、3つ目の現代も、前の時代のものが無くなったところに新しい都市を建設しました。ところが2つ目の近代は、従来のものを消し去ることなく、徐々に、長い時間をかけて都市を変えているのです。そこに、近代の都市づくりの特徴の一つがあるといえそうです。

(2) 日本の「近代」の都市づくり

以上のような傾向は、日本全国に見られるものでしょう。西暦1600年前後は、大名

の配置換えラッシュで、新しい統治の拠点である城下町が次々に建設されました。ところが1615年、一国一城令が出されると、それが固定され、変化のできない状態になりました。それが250年続いたため、城下町は大きく発展することになりました。

明治になると、城下町の中心の城郭や武家屋敷が無意味になりました。全国の城下町は、新たに生き延びる方策を求めざるを得なくなったのです。近世の城下町づくりにはお手本がありました。秀吉のつくった大坂

の街など、各大名はリーダーの街づくりを見ながら、ほぼ白紙の状態の土地に、自らの城下をつくることができたのです。そして、石高によってその後の都市の容量も自ずから決まることになりました。

しかしながら、明治維新に始まる近代の都市づくりには、いくつもの難しさがありました。1つは、前述のように、既存のものを破壊することができませんでした。残された街を少しずつ改変してゆくしか方法がなかったことです。2つは、お手本がありませんでした。新しい西洋文明が入ってきたといっても、街をどのように変えて行ったらよいのか、目標も方向も示してくれる情報がなかったのです。

3つは、なによりも、「都市」というものの概念すらなかったことでしょう。どんな街にしたいのかという問題意識は全くありませんでした。

ところが明治がスタートすると、まず石高の制約が無くなり、人口増とともに成長が始まりました。そして西洋文明の伝来もあって、徐々に「都市」というものに気づいたのです。日本の近代の都市づくりは、計画というよりも、試行錯誤の連続で始まったといえるのかもしれません。

(3) 名古屋近代の変貌

明治維新後の全国の都市づくりの中でも、名古屋はとりわけダメージの大きな中での出発になりました。

明治の初め、廃藩置県になって、「御三家筆頭」の地位は亡くなりました。「60万石」という経済基盤もアヤフヤになりました。「名古屋」というまとまりさえあいまいになっ

てしまったのです。文明開化とは云うものの、その喪失感は、今では考えられないものだったでしょう。

ところが、それから60年後の昭和の初め、人口が100万人を突破した戦前の名古屋の勢いは素晴らしいものでした。「東洋一」といわれた名古屋駅もでき、幹線道路や、路面電車が縦横に走りました。また「東洋一」という中川運河をはじめ港湾も工場地帯もできました。市域は広くなり、これも「東洋一」の東山公園が完成し、区画整理が終わった広大な住宅地も広がっていました。昭和初期の名古屋は、意識は「東洋一」、実態も我が国三大都市にふさわしいものになっていたといえるのです。昭和12年、その総まとめに開かれた「汎太平洋平和博覧会」は、本格的な国際博でした。名古屋市は、太平洋を取り巻く地域の平和に貢献することをうたい、会期中に480万人を集めるという、戦前のわが国最大級の博覧会を開催したのです。

明治の落ち込みからわずか60年です。名古屋は見事なV字回復によって、立派な都市を作り上げました。その過程はどんなものだったのか、回を追ってその経過や理由を考えてみたいと思います。

3 紀行 本町通

… 城下町名古屋のメインストリート …

第1回の紀行は、城下町時代の名古屋のメインストリート「本町通」を歩いてみましょう。名古屋城から南へ4キロの道のりです。

〈大手門から〉

地下鉄の市役所駅南改札を通り、4番出口を出ます。南に進み、次の角を右に曲がると城の外堀の土手と官庁街の境の道です。しば



本町通の始点。
業務地区の休日はガランとしている

らく三の丸の中を行き、突き当たった道を左に曲がると本町御門の跡になります。ここが名古屋城の大手門でした。外堀を越えると本町通が始まります。当時は本町通の道路幅は、4間とも5間ともいいますが、今は何度かの拡幅を経て20mになっています。

通りを進むと1本目の通りが茶屋町筋です。城下の東西の最も格式の高い通りで、付近には茶屋家、伊藤家などの旧家が並んでいました。

南に進むと桜通を渡ります。戦前に造られた名古屋の凱旋通りといえるでしょうか。その次の角が伝馬町筋。江戸時代の碁盤割地区の中心、札の辻です。この角には高札場の他、伝馬会所(貨物)、飛脚会所(郵便)が設けられていました。そしてこの付近の本町通は、城



碁盤割地区の中心点、札の辻。
今は普通の交差点に



広小路の南の本町通。
窪んでいる所を白川が流れていた

下を代表する大きな店が並んでいました。まさに城下町の中心です。

南に、そこから3本目が錦通。4本目が碁盤割の南端、広小路通です。広小路は、1660年の大火の後に13間に拡幅されたものですが、次第に市民の娯楽の広場になりました。しかし明治20年、広小路は名古屋駅まで通じ、広場から道路に変わったのです。

〈大木戸へ〉

通りを越えると昔の寺町に入ります。その先で道路が凹んでいるのは昔の白川の流れています。少し先の右奥に白川公園がありますが、ここも戦前に寺町が移設され、戦後は進駐軍のアメリカ村になっていました。百米道路の手前左には若宮八幡があります。元々は名古屋城の域内にあり、築城時に尾張総鎮守としてここに移設されました。

百米道路を越えると大須地区に入ります。



戦後沈滞していた大須は繁華街として復活した

元々は寺町でしたが、広い境内に見世物や芝居小屋ができて次第に賑やかな繁華街に変わりました。幹線道路を渡ると、両側は仏壇屋街です。大須観音と、すぐ南にある西本願寺別院、さらに南にある東本願寺別院の間は信



栄国寺のキリシタン墓地。200人が処刑された



漆喰づくりの建物が街に落ち着きを与えている



国道と合流する付近に、
城下の入り口の大木戸があった

者等の通行が多かったからだといえます。その向こうは橘町です。江戸時代の初め、この付近に刑場がありました。少し行くと左手奥に栄国寺があります。藩のキリシタンの処刑が行われ、中にその供養碑があります。その後藩主の光友は刑場を他に移し、この一帯を古今集の古歌から「橘町」と名づけました。

漆喰づくりの建物の残る町並を通り抜けると、広い国道に合流します。その少し先に、城下町の出入口、大木戸がありました。交差点を左に行くと、地下鉄の東別院駅があります。

4 変化への選択

近代の都市づくりは従前のものを除却した跡に建設されるのが一般的でした。従って事業は、その除却ができるかどうかポイントになります。

ここで紹介した本町通は、道路拡幅という変化に抵抗し、主役を東側の「大津通」に渡すことになりました。それでもまだ国道が続きましたが、戦後西側に「伏見通」が完成し、その役目も終えることになったのです。

しかし、メインストリートの役割は亡くなりましたが、反面、大須の賑やかさや橘町の町並みはそのことによって残ることができたのでしょうか。「壊す」か「残す」か。今後紹介する事例の中にも、そのようなドラマがいくつか登場することになりそうです。

〈主な参考文献〉

- ①池田誠一『開府名古屋の都市づくり』
(2010、日本電気協会中部支部HP)
- ②池田誠一『なごや 戦災復興の物語』
(2007、日本電気協会中部支部HP)